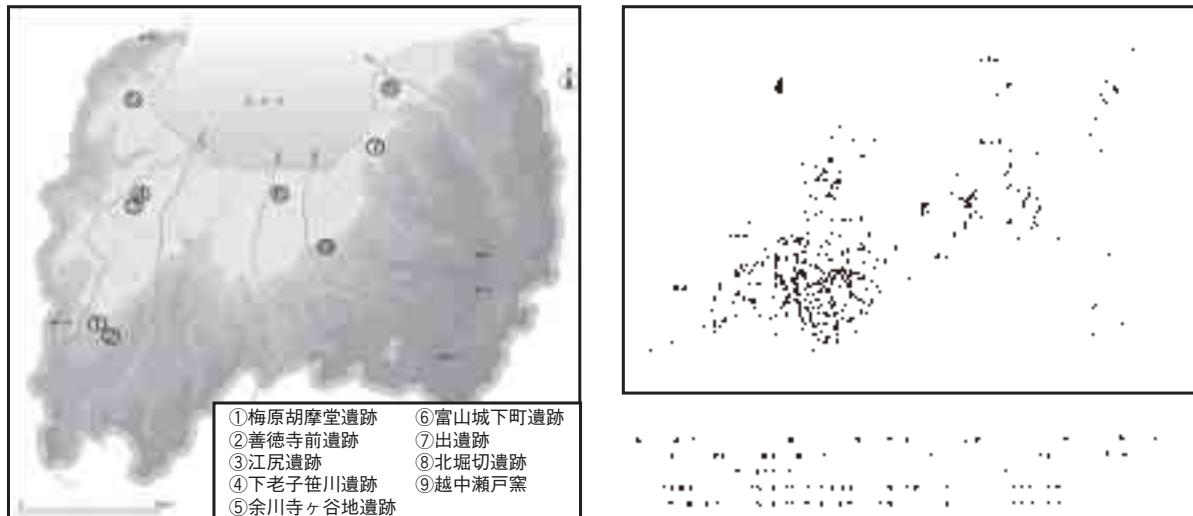


近世陶磁器出土割合一覽

梅原胡摩堂遺跡一括資料一覽

富山城跡出土遺物

遺跡名	所在地	遺跡の性格	概要
梅原胡摩堂遺跡	南砺市梅原	中核的農村 寺院	砺波平野の南西部に位置する南北1kmのわたる中近世の集落遺跡。調査区には近世から昭和初期まで続いた旧以速寺跡が含まれる
善徳寺前遺跡	南砺市城端	門前町	旧城端町は真宗大谷派城端別院善徳寺を中心に広がる門前町。16世紀末から現在まで続く
江尻遺跡	高岡市江尻	一般農村	近世から近代の区画溝を伴った屋敷跡を19棟確認。中心時期は16世紀末から17世紀、18世紀、18世紀後半から19世紀である
下老子笹川遺跡	高岡市下老子笹川	一般農村	17世紀から19世紀の農村遺跡
余川寺ヶ谷内遺跡	氷見市余川	一般農村	18世紀から19世紀の農村遺跡
富山藩城下町	富山市総曲輪	城下町	富山城下町絵図から北側は上・中級武家屋敷、南側は町屋敷に相当
出遺跡	魚津市出	一般農村	近世遺物のほとんどが包含層からの出土で16世紀末から近現代までにわたる
北堀切遺跡	黒部市北堀切	中核的農村	近世である上層面からは17世紀後半から18世紀後半にかけての区画溝を伴う掘立柱建物を確認
越中瀬戸窯	立山町瀬戸	窯跡	16世紀後半に、尾張国瀬戸より陶器工人を招来し開窯した施釉陶器である。本格的な施釉窯としては、日本海側では最古と言われる



越中瀬戸の富山県外出土遺跡一覧

新潟県における肥前陶磁器の流通

伊藤 啓雄（柏崎市教育委員会）

新潟県における肥前陶磁器の流通については、安藤正美氏〔安藤2001〕・相羽重徳氏〔相羽2004〕・渡邊ますみ氏〔渡邊2009〕等による研究がなされており、本報告もこの3氏による成果をもとにしている。報告の概要は「発表要旨・資料集」を参照していただくこととし、ここでは紙幅の関係から、時期は討論で中心となった17世紀前半（I～II期）、地域は資料が比較的充実している頸城地域（上越地域）、器種は碗・皿についてまとめることとした。なお、時期区分は『九州陶磁の編年』〔九州近世陶磁学会2000〕による。

器種組成の変遷 遺構一括資料に含まれる肥前陶磁器の主要な器種を指標とし、それぞれの段階における状況をまとめた。

至徳寺遺跡西堀上層・同南堀上層・木田遺跡SE18・同SD282・高田城跡SX010の碗・皿は、中国・瀬戸美濃・肥前・越中瀬戸によって構成される。肥前はI～2期の胎土目積みされた皿である。他もほぼ併行する時期の製品であるため、I～2期の段階で肥前陶器が流通していたのは確実であろう。I～1期に生産された藁灰釉の碗・皿も出土しているが、いずれもI～2期以降の製品とともに出土しているため、I～1期段階の流通は明らかではない。

横曾根遺跡SK37・木田遺跡SE288・同SE200の碗・皿には、II期の砂目積みあるいは溝縁の皿（陶器）がみられる。この段階になると、碗・皿は肥前陶器によって大半を占められるようになる。高台無釉の碗（磁器）などを指標とすれば、さらに時期の細分が可能であるが、今のところ一括資料においては確認されていない。また、陶器は定量みられるものの、磁器の共伴関係を確認できるのは横曾根遺跡SK37などに限られる。肥前磁器が比較的遠隔地へ流通するのはII～1期後半（1620～30年代）以降とされるので〔野上2000〕、新潟県もその範疇にあると考えられる。

肥前陶磁器の流通 以上のような肥前陶磁器は、日本海の海運によって生産地からもたらされたと考えられる。文献資料からは、1588年（天正16）に摂津平野商人の東末吉家・西末吉家がそれぞれ最上義光・上杉景勝から分国内の自由通行を認められたこと、1593年（文禄2）に末吉家が越前北袋銀山の採掘権を得たこと、1592年（天正20）の朝鮮出兵の際に景勝が肥前名護屋に米を輸送していること、1628年（寛永5）に小倉藩が出羽庄内に買米に出向いていることから、16世紀末には北東日本海と北九州が結びつくようになったと考えられている〔矢田2002〕。

越後での流通については、幕府によって整備された街道のほか、河川による運輸もその担い手となつた。頸城地域では関川とその支流で川舟が活動しており、河口の今町がそれを特権的に独占していた。高田藩では、17世紀前～中葉から城下町のほかに舟運についても整備している〔原2004〕。

新潟県では、I～2期から肥前陶磁器の流通を確認することができた。海上輸送されてきた製品が河川などによって内陸部まで普及することができるようになったと考えられる。

【参考文献】

- 相羽重徳 2004 「頸城平野における近世陶磁器の様相」（新潟県考古学談話会発表資料）
安藤正美 2001 「新潟県の主な近世遺跡」『国内出土の肥前陶磁－東日本の流通をさぐる－』（第11回九州近世陶磁学会資料） 九州近世陶磁学会
九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会10周年記念－』
野上建紀 2000 「碗・小壺・皿・紅皿・紅猪口」九州近世陶磁学会2000に所収
原 直史 2004 「川の流れに沿って」上越市史編さん委員会編『上越市史』通史編4 近世二 上越市
矢田俊文 2002 「北東日本海経済圏の解体－北東日本海域－」『日本中世戦国期の地域と民衆』 清文堂出版
渡邊ますみ 2009 「新潟県出土の近世擂鉢について－近世前半（16世紀末～18世紀）を中心とした流通の様相－」『新潟考古』第20号 新潟県考古学会

1 村上城跡（含：ニノ町地区など）

2 天王前遺跡

3 金曲遺跡

4 高田遺跡

5 窪田遺跡

6 下町・坊城遺跡

7 新発田城跡

8 正尺A遺跡

9 笹山前遺跡

10 近世新潟町跡

11 細池遺跡

12 江内遺跡

13 横表遺跡

14 反井遺跡

15 加坪川遺跡

16 元屋敷遺跡

17 奈良崎遺跡

18 山田郷内遺跡

19 柏崎町遺跡

20 新保遺跡

21 水久保遺跡

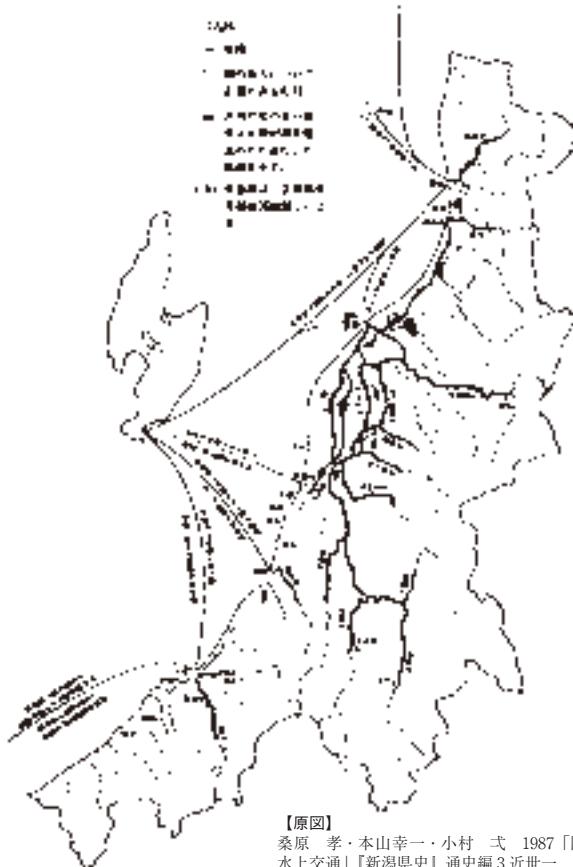
22 四ツ屋遺跡

23 高畠遺跡

- 24 木田遺跡
25 高田城下鍋屋町遺跡
26 高田城跡
27 蟹沢遺跡
28 海道遺跡
29 関川関所跡
- 30 岩倉遺跡
31 糸魚川鉄砲町遺跡
32 寺地遺跡
A 至徳寺遺跡
B 福島城跡
C 横曾根遺跡

【原図】
渡邊ますみ 2009「新潟県出土の近世播鉢について－近世前半（16世紀末～18世紀）を中心とした流通の様相－」『新潟考古』第20号 新潟県考古学会

第1図 新潟県におけるおもな近世遺跡の位置図



第2図 新潟県における近世初期の海上・河川交通路

遺 跡	遺 構	碗			皿			碗皿類 その他 (产地無 記載は肥 前産)	碗皿類報告点数				播 鉢	そ の 他		肥 前	その他の 報告書等	備 考	
		中 瀬 戸 唐 美 濃 津 島	肥前 (陶) 唐 初期 伊万里 無釉	肥前 (磁) 高台 台 無釉	中 瀬 戸 唐 美 濃 津 島	肥前 (陶) 初期 伊万里 目	肥前 (磁) 胎 砂 目・溝 縁		中	瀬	肥	前		肥 前	その他の 報告書等				
		中 瀬 戸 唐 美 濃 津 島	肥前 (陶) 唐 初期 伊万里 無釉	肥前 (磁) 高台 台 無釉	中 瀬 戸 唐 美 濃 津 島	肥前 (陶) 初期 伊万里 目	肥前 (磁) 胎 砂 目・溝 縁		中	瀬	肥	前		肥 前	その他の 報告書等				
至徳寺跡	北堀			○					1			1				I - 2	1		
至徳寺跡	西堀上層	○		○ ○ ○					1	1	8	10		灰釉鉄絵片口鉢	青磁瓶類・珠洲瓶類	I - 2	1		
至徳寺跡	南堀上層	○		○ ○				藁灰釉碗・ 皮輪手向付 鉄絵皿	2	8		10				I - 2	1		
福島城跡								鉄絵皿		1		1				土師器皿(ロクロ)	I - 2	1	1607年完成 1614年廃城
木田遺跡	SE18				○			鉄絵皿		2		2	肥前				I - 2	1・2	木田①
木田遺跡	SD282				○			藁灰釉皿		2		2					I - 2	2	木田①
新保遺跡	98SE650			○					4	3		7					I - 2	3	
高田城跡	SX101	○		○	○			鐵絵皿・越 中瀬戸鉄 釉碗	5	2	1	8	備前		土師器皿(手づく ね・ロクロ)	I - 2	1	高田城様相① 青花には漳窓 を含む	
横曾根遺跡	SK37					○		鎬碗?		4	1	5		陶器壺(同心円文)			II	1	
木田遺跡	SE288				○				3		3	瀬戸美濃	鉄釉壺・藁灰釉瓶				II	1・2	木田②
木田遺跡	SE200				○			藁灰釉碗・ 大皿	5		5	肥前(ロク 口)	陶器壺・陶器天目 台				II	2	木田②
子安遺跡	SE20581				○ ○				6		6						II	4	
子安遺跡	SE20422				○				1	1	肥前(ロク 口・口縁鉄 瓶)	磁器瓶				II	4		

報告書等

1 上越市史専門委員会考古部会編2003『考古－中・近世資料－』(上越市史叢書8) 上越市

2 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 2001『北陸自動車道 上越市春日・木田地区発掘調査報告書VI 木田遺跡』(新潟県埋蔵文化財調査報告書第105集)

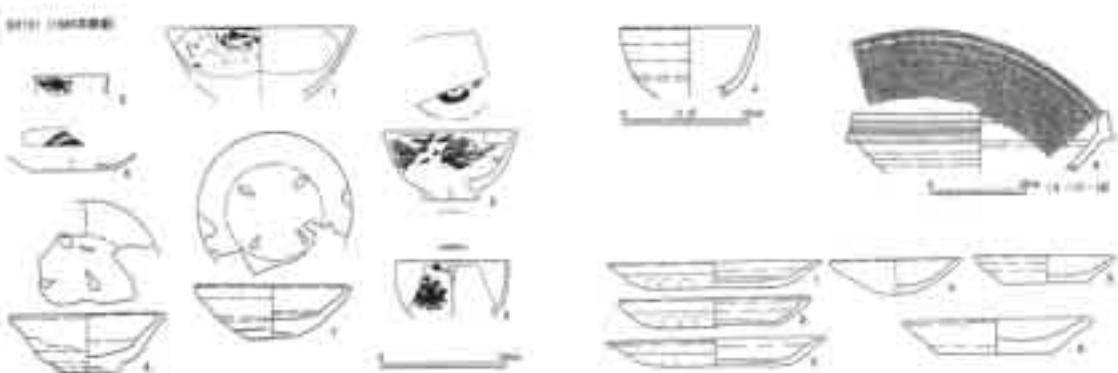
3 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 2001『国営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書 新保遺跡』(新潟県埋蔵文化財調査報告書第103集)

4 上越市教育委員会 2009『子安遺跡』

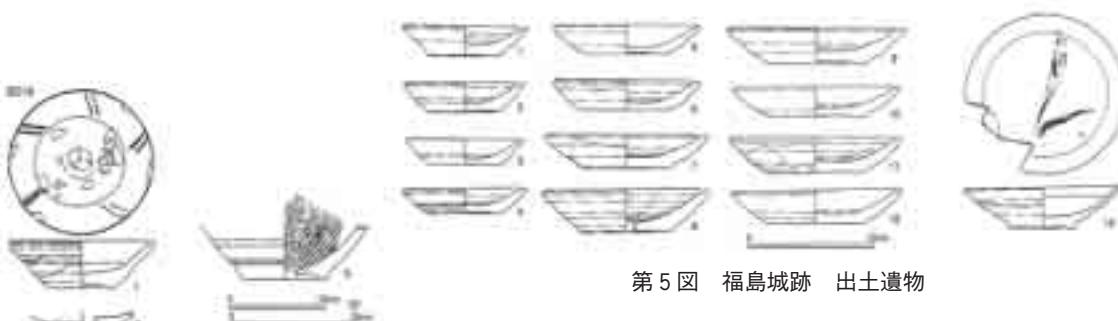
第1表 17世紀前半における新潟県頸城地域のおもな近世遺構の器種構成表



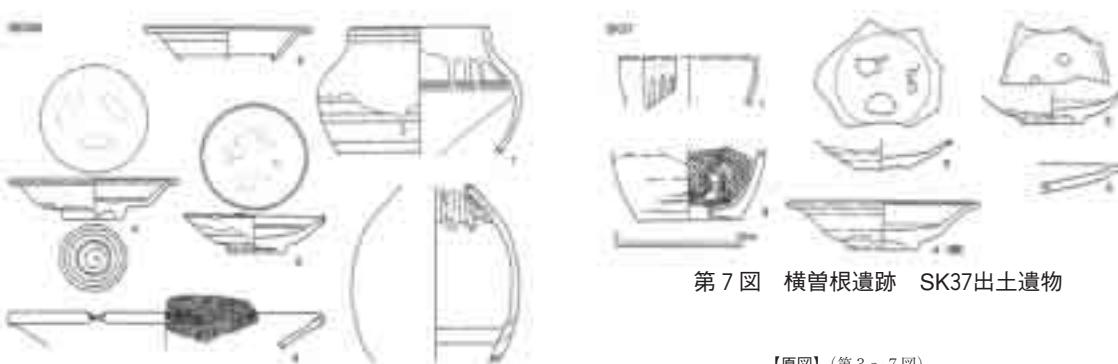
第3図 至徳寺遺跡南堀上層・西堀上層・北堀出土遺物



第4図 高田城跡 SX101出土遺物



第5図 福島城跡 出土遺物



第7図 横曾根遺跡 SK37出土遺物

第6図 木田遺跡 SE18・SE288出土遺物

【原図】(第3～7図)
上越市史専門委員会考古部会編2003『考古一中・
近世資料』(上越市史叢書8) 上越市

東北日本海域の近世陶磁器

長谷川 潤一（由利本荘市教育委員会）

東北地方日本海域の青森・秋田・山形の3県では大凡90ヶ所の遺跡から発掘調査によって肥前陶磁器の出土が確認され、いずれの県でも中世城館、近世城郭と城下が代表的な消費地遺跡といえる。このうち秋田県の代表的消費地である秋田市久保田城下の遺跡（藩校明徳館跡・東根小屋町遺跡・古川堀反町遺跡）と由利本荘市本荘城跡の事例を中心に3県での事例を概観する。

秋田県では実年代が明確な整地層や遺構からの遺物出土例がほとんどなく、陶磁器の生産地側における編年研究を基準にして、時期ごとのおおよその様相や流通・消費状況を把握している現状にある。

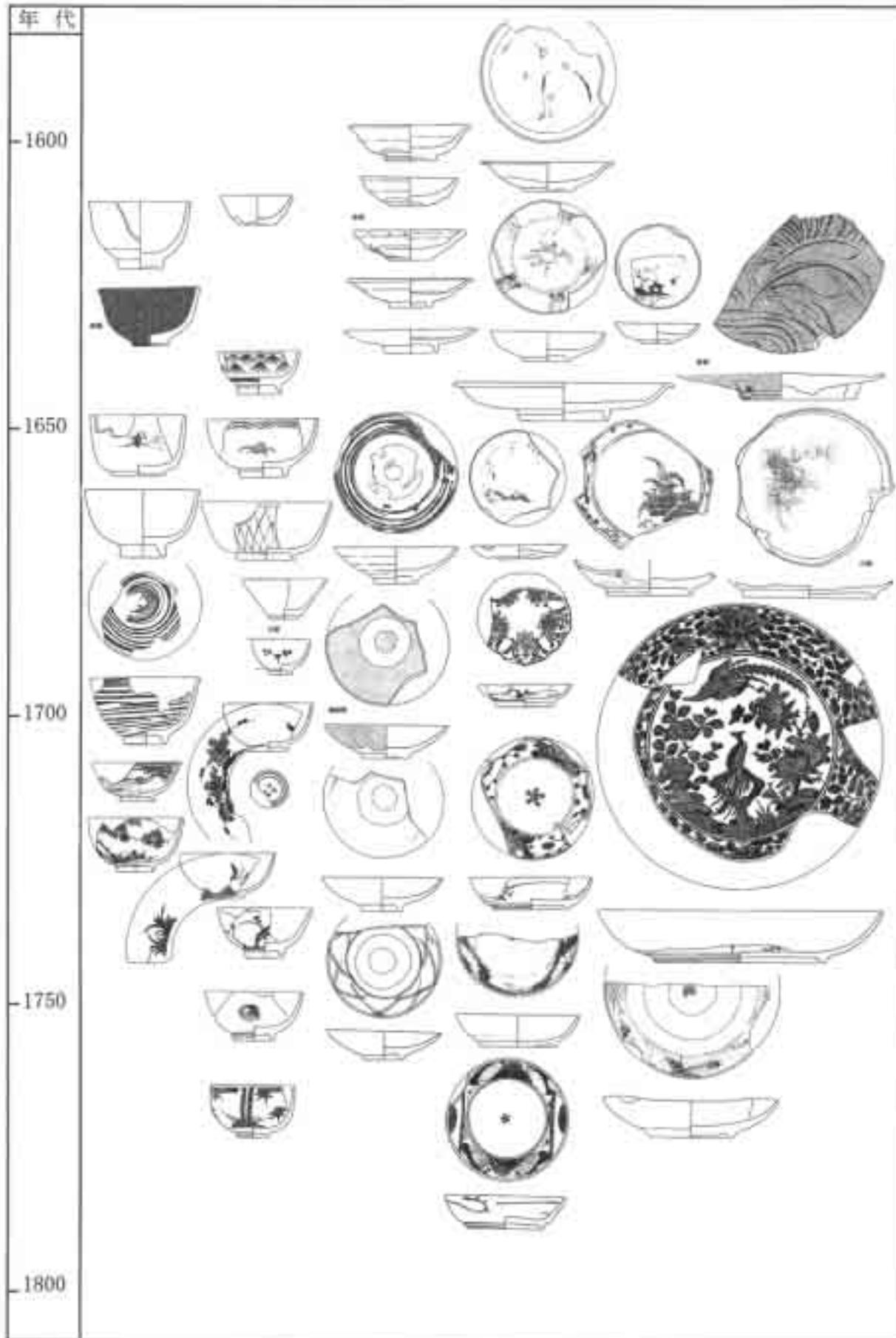
肥前で磁器が生産される以前の陶器胎土目積み段階である16世紀後葉から1600年代の段階（肥前Ⅰ期）は、肥前陶磁出土遺跡の半数以下に留まる。16世紀から美濃大窯末期の志野流通期までは瀬戸・美濃や貿易陶磁の割合が高いが、3県で数遺跡ずつ岸岳系陶器が出土し、早い時点から肥前陶器が入り始めている可能性がある。実質的に1600年代に廃絶する城館や、1607年頃に町割りが始まった久保田城下では瀬戸美濃製品が少ない割に肥前Ⅰ-Ⅱ期の陶器が一定量出土しており、1600年代後半にかけ主体的になっていく。絵唐津をはじめとした皿、碗の他に鉢や瓶も確認される。

1610年代から1650年代（肥前Ⅱ期）では、遺跡数、出土量とも増加し、城下の整備に伴い流通量が増大し、陶磁器の大部分を肥前が占める。代表的な陶器溝縁皿は久保田城下や本荘城に六郷氏が入部した1623年以降の段階で多量に出土し、平底が多いことが特徴で、鉄釉平底は秋田県が全国最多とされる。肥前Ⅰ期からⅡ期にかけては数量が少ないものの甕や擂鉢等の雑器も出土している。磁器は久保田城下遺跡で染付、色絵とも最初期とみられる製品から出土しており、食膳具の中で碗の比率が増してくる。波佐見青磁大皿、砂目積磁器、高台無釉碗もみられ、久保田城下では質量とも豊富である。

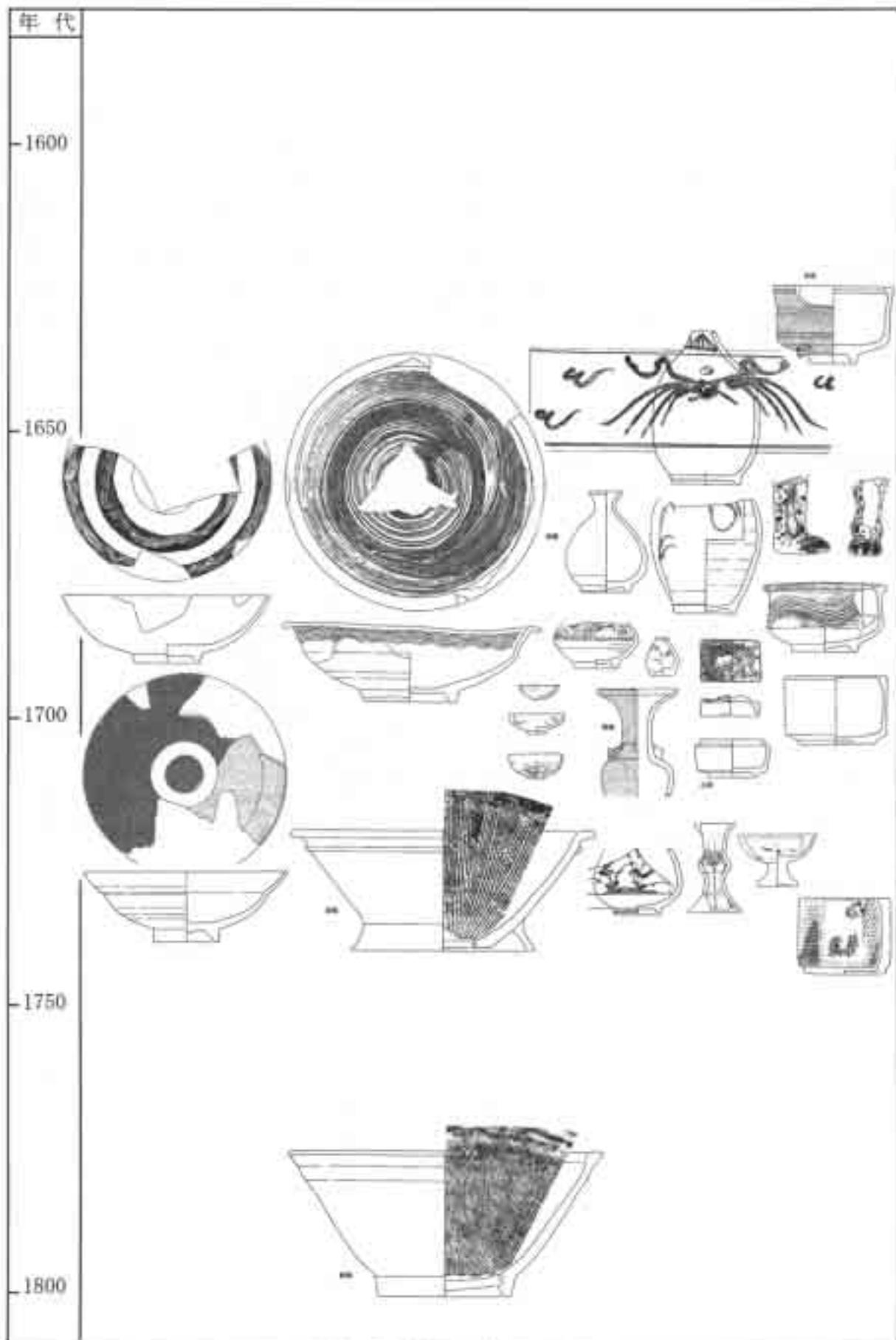
1650年代から1690年代（肥前Ⅲ期）では、遺跡数の増加が一旦止まる。碗皿では磁器が多数を占めるものの、久保田城下では刷毛目文碗皿、銅緑釉掛け分け皿、京焼風碗皿、呉器手碗が一定量みられ、久保田城下・本荘城とも刷毛目文鉢や二彩手甕も特徴的に出土する。京焼風は受容が限定的な山形県と久保田城下以外では分布の広がりがみられない。磁器は久保田城下で、Ⅲ期初め頃の吉九谷ほか色絵の高級品がみられ、1670年代前後に顯著と指摘される。器種も多様で、碗皿以外では香炉や瓶類の量が増加してくる。

1690年代から1780年代（肥前Ⅳ期）では、遺跡数が大幅に増加し、江戸時代を通じて最も多くなっている。都市部以外でも集落や周辺域で普及が進んでいる様相を示し、おおよそ18世紀半ば頃までに流通・消費の画期が認められ、久保田城下・本荘城とも出土量のピークになると考えられる。この段階でも在地窯が未成立ということもあって、陶磁器のほとんどを肥前陶磁が占める。陶器は刷毛目文、二彩手、三島手の鉢や擂鉢の比率が高く、食膳具は18世紀前半を主体に刷毛目文碗皿、内野山窯の銅緑釉皿等が若干の割合で出土するものの磁器の割合が卓越するようになり、見込みコンニャク印判の碗皿、「くらわんか手」が各地で多量に出土している。本荘城三の丸の18世紀前～中葉の藩主居館・政庁域の「御膳所」付近の多数の廃棄土坑では、陶器擂鉢とくらわんか手碗皿で全体の3／4余りを占め、嗜好性がない一括購入・大量消費を示している。

地域内での流通経路としては、北前船寄港地、特に酒田、土崎、能代、本荘など大河川河口部の湊町から基本的に河川ルートで内陸部に至ったと考えられる。



藩校明徳館跡の肥前陶磁器（1）



藩校明徳館跡の肥前陶磁器（2）